

## 満州国境守備隊から

### 台湾防衛に

佐賀県 白川 仁三郎

大正十年三月十三日、鹿島町高津原で農家の長男として生まれ、姉一人、弟妹と七人兄弟の家族と共に親の手伝いをしていました。

昭和十六年徴集兵で甲種合格、入営は昭和十七年一月十日、久留米の歩兵第四八連隊留守隊でした。本隊は満州の城子溝（牡丹江省東寧県）にあったので、初年兵教育は久留米の留守隊で行ったのです。それは満州は寒さ厳しく教育が十分行われないので、留守隊で一期の検閲まで訓練を受けました。

四月十日、久留米を出て朝鮮經由、四月二十日満州の城子溝に着きましたが、満州での再教育は連隊砲（四一山砲）です。家は農家だったから馬扱いは慣れており、何でもできましたし、体もガッチリしていま

した。砲の訓練は兵隊が鞍馬の代わりに肩からロープを掛け引つ張る。この訓練はなかなか普通の人ではできませんでした。一人が真ん中に入り両脇はロープで引つ張る。四一山砲を三人で馬の代わりに挽くのです。後は弾薬手四人が押す。山砲は一トンぐらいあって、演習のときは馬二頭で挽く、平地なら馬一頭で兵二人がついて押すのです。

両脇の人が観測と砲手をやる。観測は計算をしたり、砲手もやる。三人で回りながら訓練する。戦闘ではだれがやられるか分からないから、三人は何でもできるようにしている。弾薬手も観測から砲手の訓練を受ける。

検閲が済むと馬で挽くように訓練を受ける。その三人は馬側におり、脱架（馬の鞍の平衡棒を外して、砲身が後向きになっているのを回転）して据える。

四月二十日、城子溝の土はまだ凍っており、もちろん、小川も凍っていて荷車が通っても氷は割れない。城子溝は対ウラジオストク警備の地で、先程も申したように、四月の城子溝はこのようにまだ冬期ですか

ら、訓練ができないので内地で訓練をしていたのです。

満州では再び検閲を受けましたが、その時は初年兵だけでした。続いて第二期検閲の八月まで再訓練です。

実弾射撃は初年兵の時はないのですが、二期検閲後は古年兵と一緒に訓練です。外は風速十メートルぐらいの風が常に吹く。風が吹けば温度が下がるから六月ころまでは土地が凍っています。六月中旬になって、ようやく草の芽が萌え始めます。

それまで、オンドル式の兵舎のペーチカを焚いているので内務班は暖かい。ペーチカは不寝番が焚くが朝になるとマイナス四度、夕方ごろは温度が十度くらいになる。外気は乾燥しているので、銃剣は外で凍るが、拭くと錆びはしない。

内務班ではノモンハン帰りの古兵がいるのであまり叩かれない。しかし、馬の飼いつけのとき、古兵が初年兵を連れて行き、帰りの凹地へ来ると叩かれる。手ではない、地下足袋の底だけで叩くのです。昭和十八年兵あたりになると体力がなく、召集兵は弱兵だから、我々現役兵と違って叩かれ方は少なくなりました。

我々が三つ叩かれるのが一つくらいになりました。

我々、馬部隊は、敵が攻撃して来たときは機敏に動かねばならぬので訓練は厳しい。敵に先制されればこちらの砲がやられるし、歩兵部隊の損害は多くなり反撃も攻撃もできなくなる。特に奇襲を受けたとき、陣内に突入されたら全滅です。とに角、我々の部隊はウラジオストツクの前面ですから、しょっちゅう非常呼集がある。演習ではなく実弾を持って行動するのです。普通の戦闘と同じにしなければならぬ。相手はソ連軍だから。

ピンタは叩かれる人間と、叩かれない人間とある。叩く古兵と叩かぬ古兵がいる。兵舎と厩（馬屋）と、砲のある兵舎との距離は二百メートルぐらいあるから、叩かれた兵隊の方が早く準備できる。馬を砲の所へ連れて来る、砲手は馬を待つて準備している。準備が済んだら、連隊本部へ到着順に整列する。遅いのは連隊長から叱られる。連隊長は乗馬で待つているから、おのずと他中隊より早くしなければならぬので厳しく訓練するのです。

馬部隊は、歩兵砲（後に連射砲も）、機関銃（大隊砲を含む）三個中隊、行季、通信隊などである。城子溝は傾斜の高原で、厩の行き帰りで凹地の他から見えない所である。動作が鈍い、馬糧のやり方が遅いなどと叩かれる。口で言われるより「こんな動作では一線に行かれぬ」と気合を入れられる。いざという時、このような厳しい訓練をした兵や隊の方が早かった。馬部隊は連帯責任ですから。

馬部隊の兵隊は、馬の背や脚をこすってやります。兵隊は休憩もできず直ぐ出発だ。私は二期の検閲が過ぎ、毒ガス要員となり本部へやられました。ガス兵といっても教育で防毒マスクを装着したり脱いだりの訓練だけで、実地の訓練はなく、ただ本部要員として三カ月勤務しました。その後は連隊長の伝令を命ぜられました。

満州の夜は広い所に同じような幕舎があるので、自分の部隊がどこか分からなくなることがある。地平線がズーッと広がつて同じ景色ですから、騎馬伝令は、辺りに民家は一軒もなく苦勞します。国境なのでソ連

領からこちらがわからないように、杭を立てて、八番線（針金）が張つてある。それに木の枝をつけて遮蔽してあります。国境に近いので、高地からは黒龍江の支流の先にウラジオストックの街が見えます。

私は一選抜で上等兵になり、それから連隊本部の伝令専門でした。ところが、演習では絶対に生水を飲むなと言われていたのに、喉が渴いて、つい大丈夫だろうと奇麗に見えた水なので飲み大腸炎となり、結果的には任官できませんでした。他隊へ転属した者は早く進級しましたが、我々同年兵は四人だけ残つて二年間本部勤務をしていました。

私は、二年間の満州生活をもう一度振り返つて話をしてみます。

満州は九月中旬からもう水が張る。その頃に携帯天幕を一個分隊分つないで、一〜二カ月間露営をして訓練します。毎日毎日平地での訓練です。露営地は部隊から五キロぐらい離れた所で毎年の慣例でした。九月中旬には二回くらい雨が降り、天幕の縫目の穴から雨が漏り、飯盒で水を受けていました。

本部の天幕は二重になっていて雨は漏らず幾分暖かい。城子溝辺りは九月でも零下四〜五度。九月末は零下十度ぐらいで、靴の先が凍る。朝八時には野外訓練が始まります。連隊砲は陣地を決め実弾射撃をする。ウラジオオストックは高地からは見えるが、二十キロぐらい離れている。

次に冬期演習のことですが、ウラジオオストック近くの山の鞍部の下の谷間に戦車壕を掘ります。ソ連側から見えないように幅四メートル、深さ二メートルで長さ五〇メートルのものを各隊受持ち、一カ月間の訓練期間で大体完成する。どんなにつらくても、ノルマはやりとげなければなりません。兵隊は交代・交代で作業する。交代しないと軍手、毛糸手袋三枚でも凍傷になってしまいます。

この作業も期間と作業が決められてあるので、各隊競争ですから一番気をもむのが分隊長クラスです。したがって、兵隊は気合が入らぬと叩かれる。結果的には叩くことが必要になる。叩くことは鍛えることで、それで強い兵隊ができた。特に我々九州の人は気性が

激しい、「九州の兵隊は強い」とだからとも言われていました。

冬になると国境の川が凍るので、ソ連兵が侵入して国境警備隊と撃ち合いになることもあります。我が軍の戦車壕には、何メートルおきかにトーチカが作つてある。満州の土は冬になると凍るので、コンクリート並みになり弾丸も貫通しない。私は山を掘つた所にある作戦本部で、毎日歩哨などして警備をしたり、巡察将校の護衛に行つたこともありました。

十九年四月、第十二師団（剣部隊）は全部南方へ移動が決定し、勤務地は天王山と言われた比島でした。ところが満州へ来た代替部隊の装備は悪く、兵器も十分ではありませんでした。そのとき、私も残務整理で二週間ほどいましたが、東北の補充兵が多かつたようです。この頃になると、満州の甲装備の師団はほとんど他の戦線へ転出し、関東軍の戦力はだんだんと弱体化していったようでした。

満州から、山下奉文軍司令官がフィリピンへ連れていった師団は全部やられてしまいました。我が第十二

師団は、三日間のつもりが十二日間もかかり、比島行きが台湾行きに変更になってしまいました。

昭和十九年四月二十日、釜山から下関へ上陸、民家に二泊し輸送船の来るのを待っていて、二十五日ころ下関港を出航しました。七千トン級の船ということですが、片側に魚雷攻撃を受けた穴があり、心配しましたが、米軍の潜水艦を避けながらの航行で台湾の基隆に着くの二十日間ぐらいかかりました。先発した通信隊や第三機関銃の乗った船は鹿児島沖でやられ、多くの犠牲者が出たと、後で聞きました。

比島行きがなぜ台湾に、いつ変更になったかは、我々は本部にいてもわかりませんでした。基隆で上陸して雨が降りつめていたので、雨避けのため軒下にロープを張って馬をつないでいました。私たち兵隊は「全部降ろしたのだから台湾警備か」と噂をしていながら一週間そこにいました。その後、第十二師団全部が台湾駐留と決まったためか、我々の久留米歩兵第四十八連隊は列車で台南の農学校へ移り、連隊本部は師範学校へ、各隊もそれぞれ部落へ駐屯しました。付近

には台南航空隊もあり、台湾の沿岸防備の任務を命ぜられたということでした。

五月二十八日、有名な台南大空襲があり、十時ころから台南市の民家はアツという間に全部焼けました。B 29は爆撃、B 24は焼夷弾投下です。我々の兵舎のあった師範学校は大丈夫で被害はありませんでしたが、犠牲になったのは台南の人たちでした。爆弾の跡には大穴があき、水が溜って水牛が中で水浴しているというのんびりした風景もありました。

我が軍はいよいよ台湾防御ということで、米軍を上陸させぬため戦車壕やトーチカ作りを続けていました。その間、各隊ともマラリア患者は出ましたが、食料は最後まで良かったのです。連隊長が各隊を巡視するとき、連隊長が兵隊に聞くと「大丈夫です」と、報告していました。食料は芋を作ったり、民家の物を食べましたが、終戦になると民家の物は食べられませんでした。

終戦は八月十五日、玉音放送は聞きましたが、よく分からなかった。連隊長から「負けた」と聞かされま

した。連隊旗は九月ころ焼いたが、旗は房だけの立派な物だった。各中隊は遠いので本部だけで連隊旗とお別れをしたのです。感無量で、この時「負けたのかな」という感じはしましたが、台湾では犠牲が無かったので、負けた実感はありませんでした。

武装解除は中国軍に、兵器や馬匹をキチンと整えて渡しました。馬は日本兵と別れるのを知って、中国人に手綱を渡すと馬はバタバタしました。連隊長の馬など良い馬は惜しかった。言葉も日本語でないと馬に通じない「ドウドウ」と言っても中国語では分からなかったでしょう。

抑留は山の中へ竹で葺いた家を作って三カ月くらいの生活。帰るまで給与は日本の旧軍隊の物を使い、余ったものは中国軍に渡したのでしょう。中国人は台湾人を使って日本兵の状態を監視していたようです。中国の兵隊は日本軍より少ないから警戒していました。そのため食糧も十分与えて早く帰還させたのでしょう。

高雄に兵団主力がいたので高雄出航、鹿児島上陸は二十年十一月八日、鹿児島師範学校に三日間泊まり、

家に着いたのは十一日です。家には連絡しないで帰ったので、家の者はボーツとしていました。両親は五十歳ぐらいだから丈夫でした。弟は兵隊へ行って幹部候補生で私より早く帰っていました。

家は農業を続けていたので農地解放はされずに済みましたが、解放された土地を受けた者は、地主に「貴方から農地を分けてもらったのではない、国から分けてもらった」と言っていました。出征して留守のため農地を解放された地主で随分残念がっていた人もいましたが、解放のお陰で小作農の人も助かったので。しかし、現在は高齢化し後継者もない、田圃も売れないという世の中になっています。一町歩田圃を作って働いても、収穫は、高校卒業者の給料よりはるかに少ないということです。もし第十二師団がフィリピンに行っていれば、大部分の者が戦死していたろうし、また満州に残った人たちはシベリア抑留されていたでしょう。幸、不幸は私たちの力ではどうにもならなかったのです。